

「心を育てる道徳教材集」の活用にあたって

1 作成の趣旨

学校においては、これまでも、生命尊重はじめとした道徳教育の充実に努めてきたところであるが、一昨年7月に長崎市で起きた中学生による幼児誘拐殺害事件や昨年6月に佐世保市の小学校で発生した児童殺傷事件等を踏まえると、子どもたちに、命はただ一つ、かけがえのないものであり、一度失われると二度と取り戻せないこと、そして、どのようなことがあっても他人の命を奪うようなことがあってはならないことをしっかりと教える必要がある。

そこで、県内の各小中学校における命の教育の一層の充実を支援する立場から、児童生徒の発達段階に応じて、命の大切さや「生と死の意味」を見つめ考えさせるための本県独自の道徳教材を作成することとした。

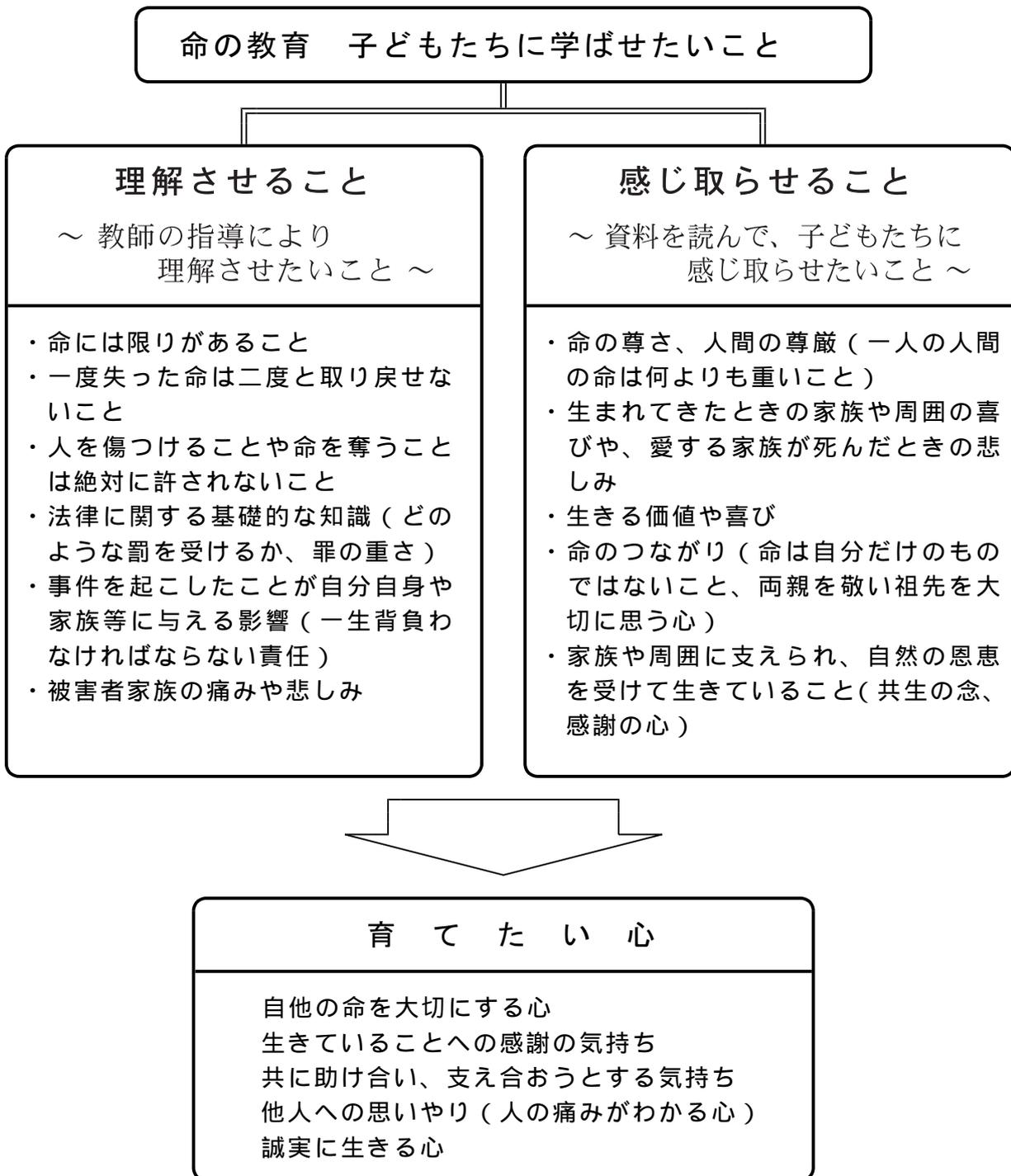
2 作成の基本方針

- ① 「よりよく生きる」という「生」にかかわる部分だけでなく、「生と死」の両面から子どもたちの心に迫ることのできる教材とすること。
- ② 人の命には限りがあり、一人一人がかけがえのない存在であることを感じ取らせることができるよう工夫すること。
- ③ 命が失われることによる家族の深い悲しみや、人を殺したり傷つけたりすることによって派生する社会的な責任、周囲への影響等について理解を深める教材とすること。
- ④ 児童生徒の発達段階に配慮するとともに、効果的な指導方法や関連資料等を具備した教材とすること。

3 教材の内容構成

- (1) 本道徳教材集は、読み物資料、授業展開のモデル、関連資料を1セットとして、小学校低学年用、中学年用、高学年用を各2時間分、中学校用3時間分、計9時間分の教材で構成している。
- (2) 人や動物の死、人を殺したり傷つけたりすることの重大さ等について、子どもたちの認識を深めるため、「児童生徒の『生と死』のイメージに関する意識調査」の結果や過去の事件の判例（改作）を基にした関連教材を添付している。

4 命の教育の視点 ～本教材による指導を通して子どもたちに学ばせたいこと～



<参考> 本教材集では、次のような言葉・表記を使っています。指導に当たって大切にしたい表現です。

- ・ 動植物には命がある ・ 生命の尊さを知る心（生命の尊さ）
- ・ 生命に対する畏敬の念 ・ 生命を尊重する心（生命の輝き）
- ・ 生きることそのものの価値 ・ 命を輝かせて生きることの大切さ
- ・ 生きる価値 ・ 生きる喜び ・ 命のはかなさ ・ 命の支え合い
- ・ いのちの重さ ・ いのちの尊さ ・ いのちのありがたさ

5 活用上の留意事項

- (1) 本教材集には、小学校低・中・高学年用として各2題材、中学校用として3題材を載せているが、実施する学年や時期は、児童生徒の実態や道德の時間で扱う他の題材、総合的な学習の時間や学校行事等における体験活動との関連などに配慮して各学校で判断し、年間指導計画に位置づけて計画的かつ効果的に活用すること。
- (2) 基本的には、1題材を1時間で扱えるようにしているが、展開の仕方を工夫したり、他の題材を併用したりするなどして複数時間で扱うことも考えられる。
- (3) 各題材ごとに示している「事前指導・事後指導の工夫」を参考にして、学習の深まりと継続的な指導を図ること。
- (4) 指導に当たっては、児童生徒の生活体験や家族の状況等にかかわって配慮を要する点がないか、十分に検討しておく必要があること。
- (5) 「児童生徒の『生と死』のイメージに関する意識調査」を生かした指導資料は、それだけでは道德の時間の趣旨に沿うものではないので、他の題材の補助資料として扱ったり、学級活動や学校の裁量で活用できる時間に取り上げたりするなど、各学校の実態等に応じて活用の仕方を工夫すること。
- (6) 本教材を活用した授業を保護者や地域に公開したり、使用した資料を各家庭にも配布し、命の大切さについて親子で考える契機としたりするなど、学校・家庭・地域の連携を深めることにも配慮すること。

6 教材の概要

I 小学校 低学年

1 「あさがおの かんさつ」

アサガオは世話が十分でないとしおれてしまうことや、最後に枯れても種を残していくことから、命の大切さや種から種へと受け継がれる命の連続性を感じ取らせることができる。生活科で学習したアサガオの種まきから種とりまでの一連の過程を想起させながら授業を展開したい。

2 「いただきます」

小学校でよく行われている給食集会を題材として、人間が口にするものすべてに命があることや、人の命は周りの多くの命に支えられ、生かされていることを感じ取らせることができる。

II 小学校 中学年

3 「わたしは お姉ちゃん」

主人公が母のおなかにいる赤ちゃんと同じように生を受け、その誕生を家族が喜んでいたことを知る場面を通して、人がこの世に生を受けるの神秘性や喜び、命の尊厳性を感じさせることができる。

4 「精^{しょう}霊^{りゅう}流^{なが}し」

精霊流しに参加しようとする主人公と病気で参加できない母親との間に交わされる会話や行動を通して、互いのことを思い合う家族の心の交流を感じ取らせ、親子の情の深さと命の有限性に気づかせることができる。

III 小学校 高学年

5 「『いのち』の重さ」

長崎の被爆体験を題材として、原爆による絶望感を克服し復興していく様子から、人が生きていく力強さを感じさせるとともに、亡くなった母と姉の笑顔を思い出す場面を通して命の大切さとその有限性に気づかせることができる。

6 「おりづる」

父親が娘に祖父の命（病気）について話をしている場面から、家族に死が訪れることによる深い悲しみと命の有限性を感じさせることができる。また、病気の祖父への思いを折り鶴に託す主人公の心情をとらえさせることで、人の死がいかに悲しいものであるかを感じ取らせたい。

IV 中学校

7 「愛は命を支える柱になる」

姉である作者が、妹の体調が悪くなったときに人知れず涙を流す場面から、命の有限性と精一杯生きることの大切さに気づかせるるとともに、一つの命を取り巻く家族の深い愛情を感じ取らせることができる。

8 「あの日帰らぬ父に 普賢岳のもとで」

消防団員であった父が雲仙普賢岳の災害で殉職した悲しみに負けることなく、生きていこうとしている主人公の強い気持ちに共感させるとともに、自分の命をかえりみず災害現場に向かう主人公の父の姿から、社会のために命がけの仕事をしている人がいることや人間の力が及ばない自然の力を感じ取らせたい。

V 「児童生徒の『生と死』のイメージに関する意識調査」を生かした指導

10 小学校用

調査結果を基に「死んだ人や動物が生き返るか」について考えさせる活動を通して、一度失われた命は決して取り戻すことができないことや、ゲームのようにリセットできないことを理解させたい。

11 中学校用

調査結果を基に「死んだ人が生き返るか」について考え、日頃の生活を振り返る活動を通して、命の連続性や有限性を見つめさせ、自他の命を大切にすることを養うことができる。

12 判例を使った指導（中学生向け）

過去にあった殺人事件の判例（改作）や事件後の家族の状況を知ること、事件を起こした本人が受ける罰の重さと周囲に与える影響の大きさを感じ取らせることができる。